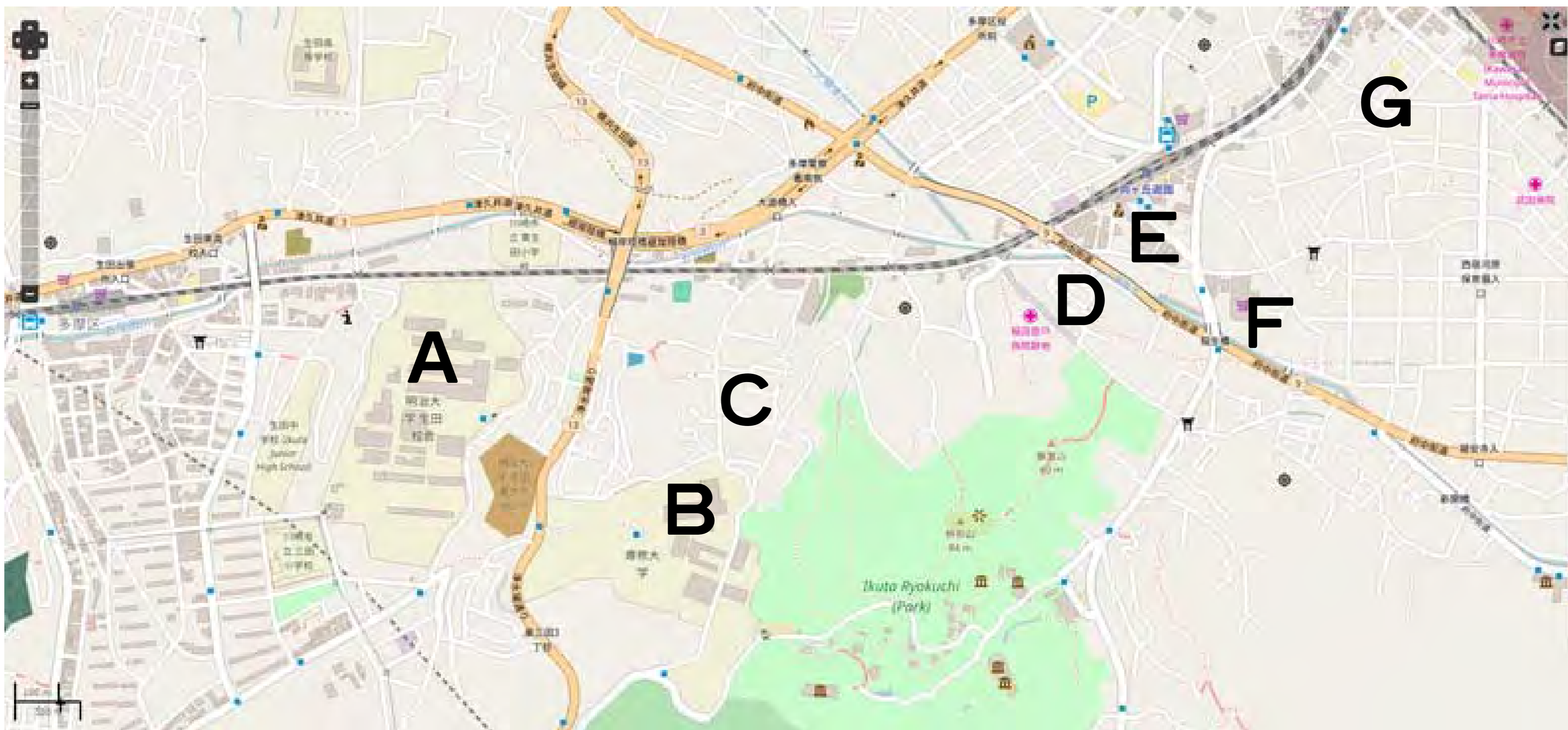


3 地域から追う登戸研究所

(1) 多摩区内に点在する登戸研究所関連施設など

小田急線登戸駅～生田駅周辺域には，登戸研究所関連施設などが点在していました。ここでは，これらの施設を紹介し，地域から登戸研究所の姿を追います。

登戸研究所関連施設跡など所在地



© OpenStreetMap contributors

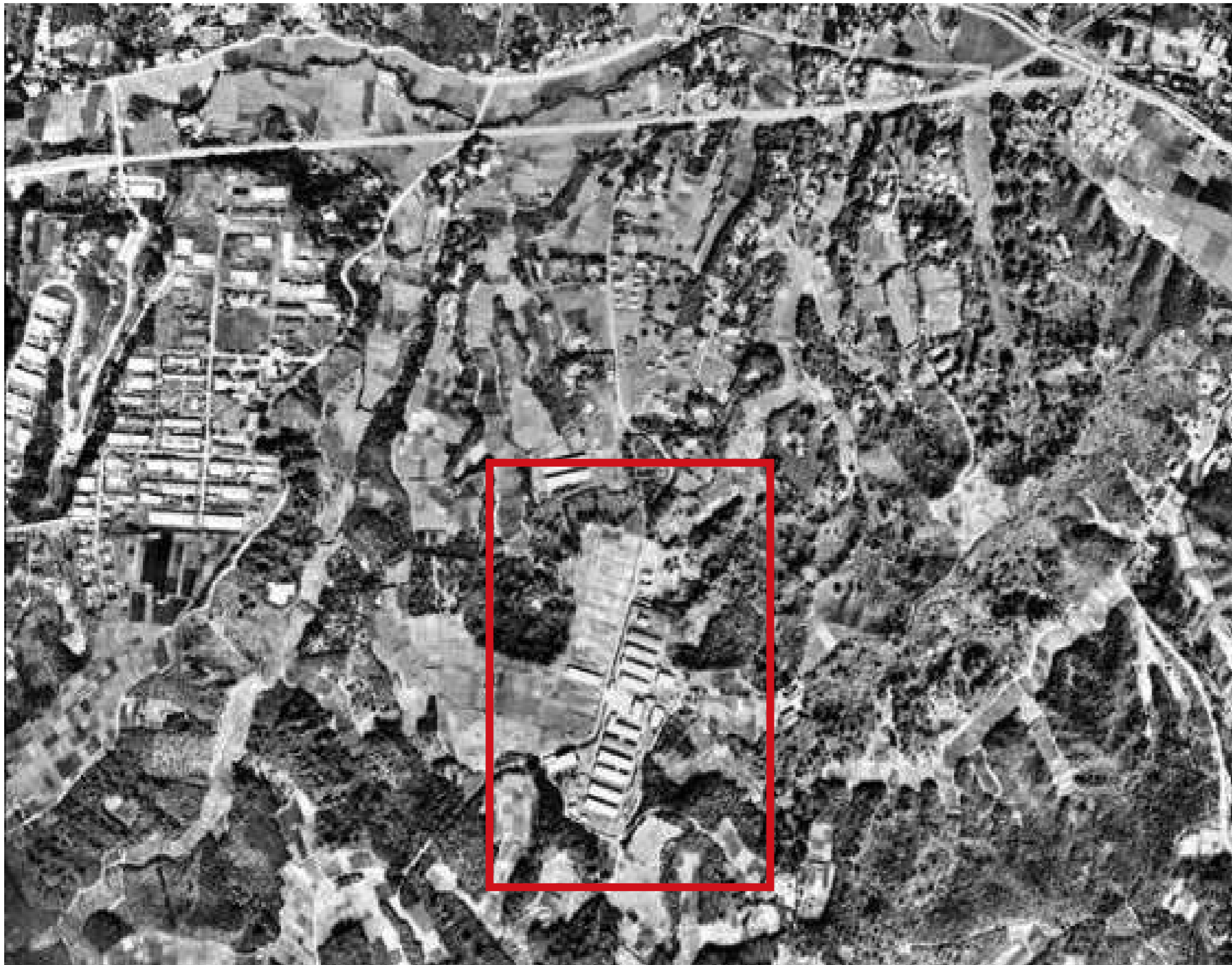
- A 登戸研究所跡（現・明治大学生田キャンパス）
- B 日本電気 / 住友通信工業株式会社^{*}研究所生田分所跡（現・専修大学生田キャンパス）
- C 登戸研究所第三科関係者寮跡（現・多摩区柘形6丁目19～20番地）
- D 伴繁雄ら登戸研究所員が居住した営団住宅跡（現・多摩区東生田1丁目4～5番地）
- E 住友通信工業株式会社研究所稲田工場跡（現・ウェルパーク薬局向ヶ丘遊園南口店周辺）
- F 登戸研究所登戸分室跡（現・ダイエー向ヶ丘店周辺）
- G 小田急線～南武線引き込み線跡（現・三菱東京UFJ銀行登戸支店周辺）

* 1943(昭和18)～1945(昭和20)年，社名が日本電気株式会社から住友通信工業株式会社となる。

①日本電気 / 住友通信工業株式会社研究所生田分所跡

明治大学生田キャンパスに近接する専修大学生田キャンパス。同キャンパスは、1948(昭和 23)年に、日本電気株式会社(日電)研究所生田分所跡地に開設されました。それでは、

生田分所とはどのような場所だったのでしょうか。



日本電気株式会社研究所生田分所 航空写真

赤枠部が生田分所。左上には登戸研究所が見える。

(米軍 1947 年 9 月撮影, 国土地理院所蔵)

a. 場所の選定

日電の研究所は向河原(川崎市中原区)にありましたが、テレビジョン研究のため、1940(昭和 15)年、生田に分所設置が決定しました。生田が選ばれたのは、向河原や東京から近く、電波障害が少ない場所だったためです。この点は、電波の実験場からスタートした登戸研究所にも通ずるところ

があります。また、1943(昭和 18)年頃には、現・向ヶ丘遊園駅南口近くに同研究所稲田工場が開設されました。

b. 研究内容

生田分所の当初の主要研究目的はテレビジョン研究であり、所内には 80 m のテレビ塔も建てられました。しかし、1938(昭和 13)年の東京五輪開催中止決定以降、テレビジョン研究は縮小されたため、生田分所は電波兵器(レーダー)研究へとシフトします。

なお、大沢寿一元分所長は、テレビジョンの研究施設として開設されたのは表向きの理由であり、実際は開設当初から電波兵器開発を目的とする研究所だったと述べています。

分所の主要な研究内容は次の通りです。

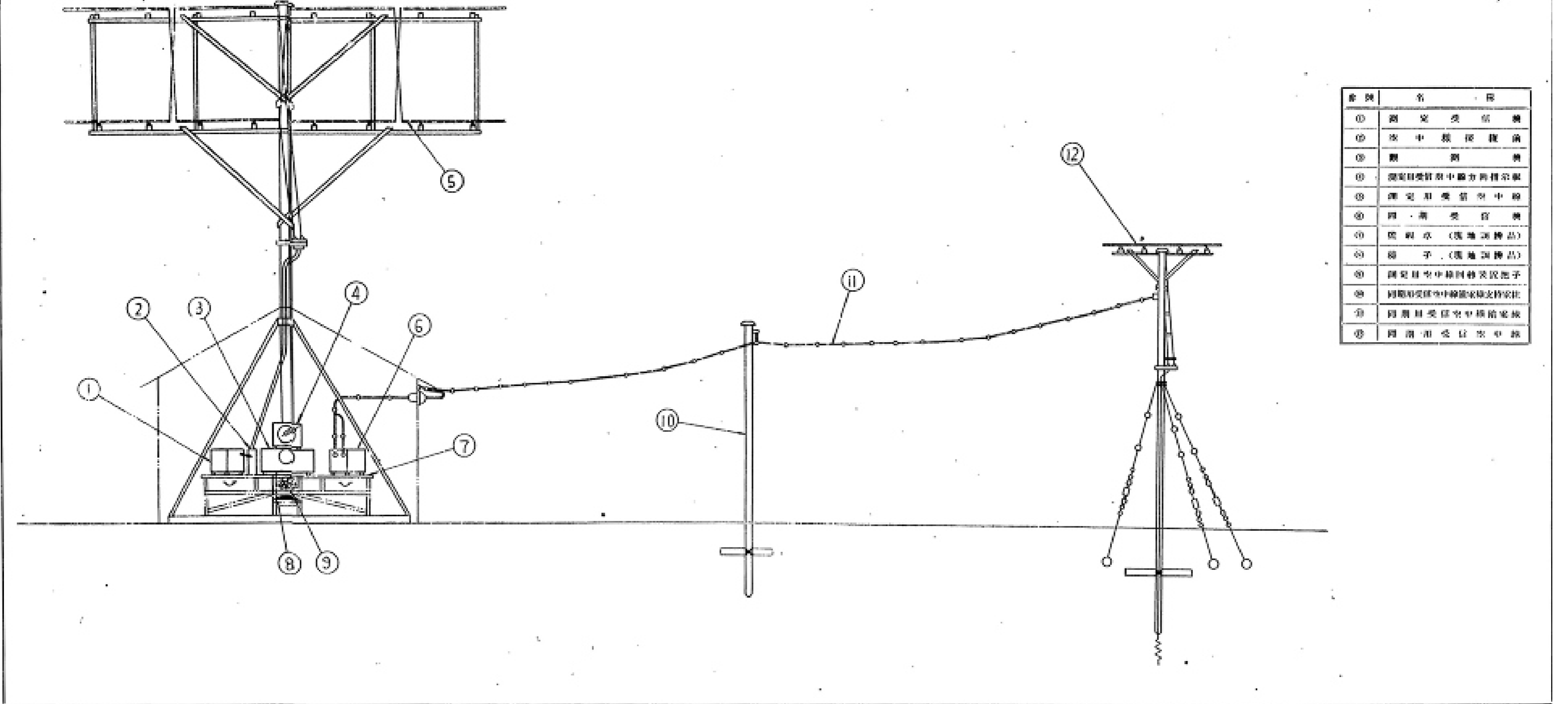
・レーダーの開発

→当初はドップラー効果を利用した方式を研究していたが、1941(昭和 16)年の夏以降は、超短波衝撃波発射レーダー研究へと移行。実用化へ向けて研究を行う。同年 8 月には受信に成功。10 月には飛行機を確認できるようになる。このレーダーは、B-29 来襲時の早期発見に役立った。

・ばんきょくかん板極管の開発

→1944(昭和 19)年から、レーダーの精度を上げるため、極超短波域に対応できるよう、試作に取り組む。成績は良かったが、試作ができたのみで終戦を迎える。

試製二二九号4型受信機總組立図



試製二二九号4型受信機總組立図

生田分所で研究開発していた、超短波衝撃波を利用したレーダー。昭和19年9月発行「要地用超短波警戒機受信装置説明書」より。
(JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A03032150400 (第42, 43画像目から))

c. 登戸研究所との接点

陸軍は1943(昭和18)年7月、立川に多摩陸軍技術研究所(多摩技研)を開設します。これは、登戸研究所の第一科や第二、第五、第七陸軍技術研究所、第四航空技術研究所に分散していた電波兵器関連の研究部局・人員を一か所にまとめ、電波兵器の実用化を促進するためでした。また、軍外部からの研究力を総動員するため、企業や大学内に研究室を15か所設置しました。そのうちのひとつが生田分所内に設けられます。そして、生田分所副所長であり、超短波無線機器や真空管の研究などに長けていた小林正次を嘱託に任命しました。ここに、登戸研究所との接点が見いだせます。真空管、絶縁材料などの基礎研究を担当した多摩技研第二科、この科長は、登戸研究所第四科長の畑尾正央大佐が兼務していたのです。また、電波兵器の開発や基礎研究に携わっていた登戸研究所員の多くが多摩技研に移ったため、登戸研究所と生田分所には何らかの接点があったと考えられます。

さらに、電波兵器以外にも接点があったことをうかがわせる記述も残っています。以下、元生田分所職員による回想集より紹介します。

飛行機の探知には、実際に軍の飛行機を飛ばしてもらって追っかける事も有りました。

がアメリカまで飛ばした風船爆弾に使う紙風船に竹に銀紙を巻いたアンテナをぶら下げて、

飛行機代わりに追った事も有りました。 日電生田会「生田研究所回想集」(1991年)より

文中には風船爆弾用気球とありますが、風船爆弾開発が要請される前に登戸研究所が研究開発していた「せ号」(宣伝ビラ散布)用気球の可能性もあります。

日本電気 / 住友通信工業株式会社研究所生田分所 年表

1939（昭和14）年 7月	玉川向工場研究課が研究所となる。
1940（昭和15）年	生田に研究所分所設置が決まる。
1941（昭和16）年 6月	日本電気株式会社研究所生田分所開設。
7月	玉川向研究所から超短波，その他無線関係の研究陣が生田に移る。
1943（昭和18）年 2月	日本電気が住友系列の直系会社になったことを機に社名変更。 住友通信工業株式会社研究所生田分所となる。
7月	多摩陸軍技術研究所生田研究室が分所内に設置され，小林正次副所長が嘱託になる。
1944（昭和19）年 4月	軍需会社法第二次指定により，軍需工場となる。
1945（昭和20）年 1月	研究所の本拠を玉川向から生田に移す。
5月	上田，金沢などへ疎開を始める。
8月	終戦。
11月	社名を日本電気株式会社に戻す。
1946（昭和21）年 1月	超短波医療機械，ラジオ諸装置，搬送電話，音響機器，無線通信機，テレビジョン，以上の基礎研究に必要な真空管部品および材料の生産再開が認可される。
1948（昭和23）年 10月	生田研究所跡地は専修大学へ2200万円で払い下げられることが決まり，双方で契約調印が交わされる。専修大学生田校舎開設。
1949（昭和24）年 5月	専修大学生田校舎で新制大学入学式が行われる。研究所閉鎖。
1950（昭和25）年 10月	研究所の敷地が専修大学に売却される。

（日本電気社史編纂室『日本電気株式会社百年史』（日本電気株式会社，2001年），日本電気株式会社社史編纂室『日本電気株式会社七十年史』（日本電気株式会社，1972年），専修大学『専修大学百年史』（専修大学，1981年），土地台帳（横浜地方法務局麻生出張所所蔵）より資料館作成）

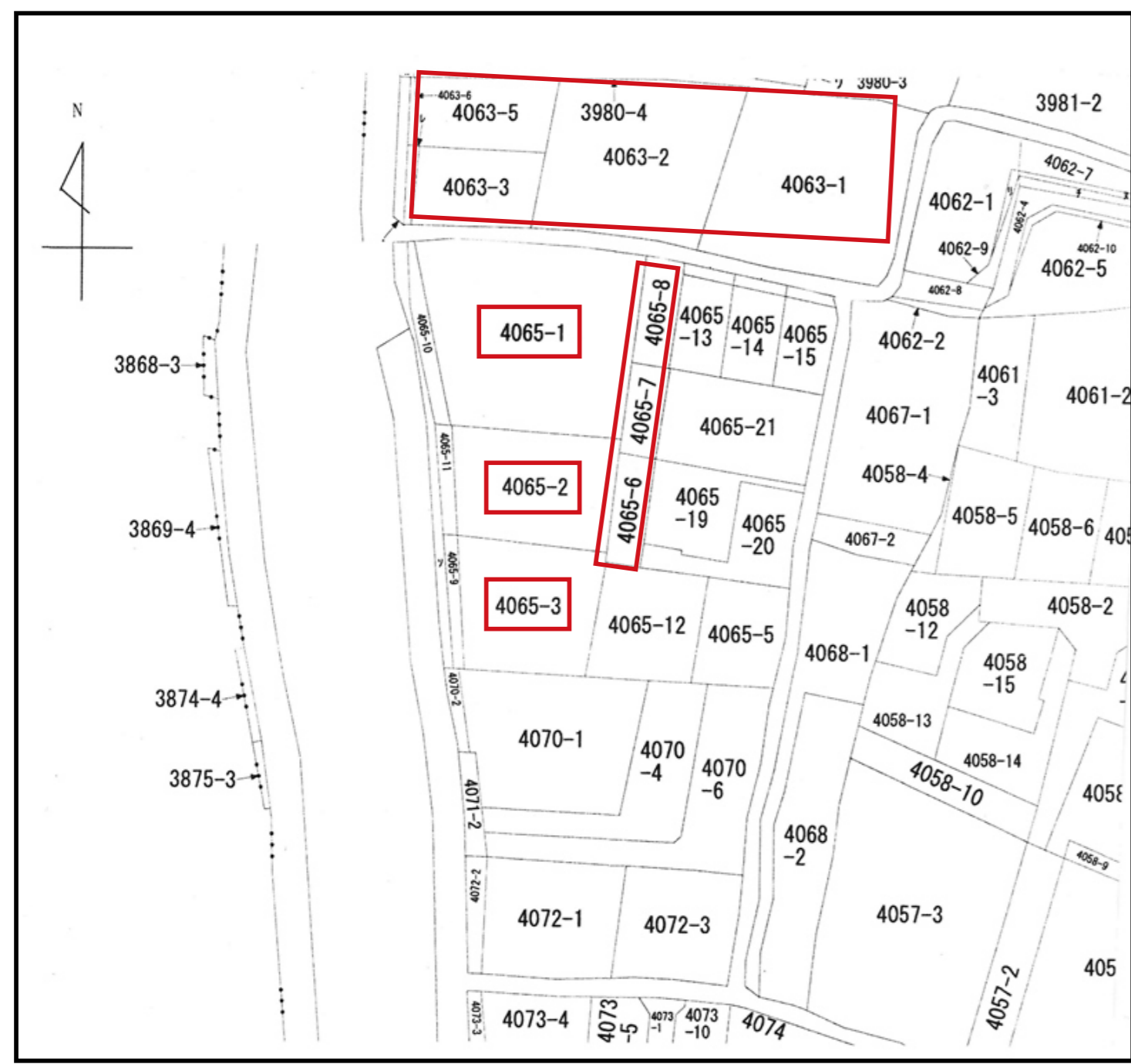
②登戸研究所第三科関係者寮跡

※ここで紹介する第三科関係者の詳細については，第四展示室をご覧ください。

登戸研究所第三科長・山本憲蔵の著書『陸軍贋幣作戦』（現代史出版会，1984年）には，偽札輸送工作者（陸軍中野学校出身）の8名は山本宅にて起居を共にした，と書かれています。彼らの任務は秘匿性が非常に高かったため，分散して住むのではなく，主任者の管理の下，まとまって住む必要があったからでしょう。

では，この場所はどこだったのでしょうか。

2012（平成24）年の稲田郷土史会の調査によって，現・^{ますがた}枳形6丁目19～20番地だったということが解りました。1943（昭和18）年1月に阪田機関（上海にあった偽札流通機関）のトップ・阪田^{しげもり}誠盛が，畑だったこの地を買収し，第三科関係者用の宅地にしたのです。1943年というと，偽札が完成し，杉工作（偽札を製造し，中国に流通させる工作）が軌道に乗る頃です。



旧土地台帳付属地図 赤枠部が阪田が買収した土地。現・柘形6丁目19～20番地。

(縮尺 1/600, 1980年横浜地方法務局麻生出張所作成, 同所蔵)

偽札工作者の一人、土本義夫によると、工作者8名が住む寮は左図4065番(現・柘形6丁目20番地)にあり、4063番(現・柘形6丁目19番地)に山本が住んでいたそうです。戦後、この地は阪田から板垣清に名義人が変更されます(左下図参照)。板垣は、広東での偽札流通工作の責任者であり、阪田から送付された偽札を使ってガソリンや石油の調達をしていました。名義人変更の事由は「代物弁済」ですが、その後、1959(昭和34)年に板垣から阪田の関係者へ土地が贈与されたため、板垣が戦後処理を任されたと考えられます。

土地台帳		物		地目		地番		地号		地積		用途		備考	
月	日	月	日	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容	種別	内容
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	1	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	2	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	3	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	6	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	7	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	13	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	14	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	15	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	19	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	20	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	21	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種
昭和	28	年	10	月	10	雑種	雑種	4065	22	100	坪	雑種	雑種	雑種	雑種



第三科関係者集合住宅の現在 写真右手には、偽札輸送工作者の寮があったと、そのうちの一人、土本義夫は証言している。

(2015年資料館撮影)

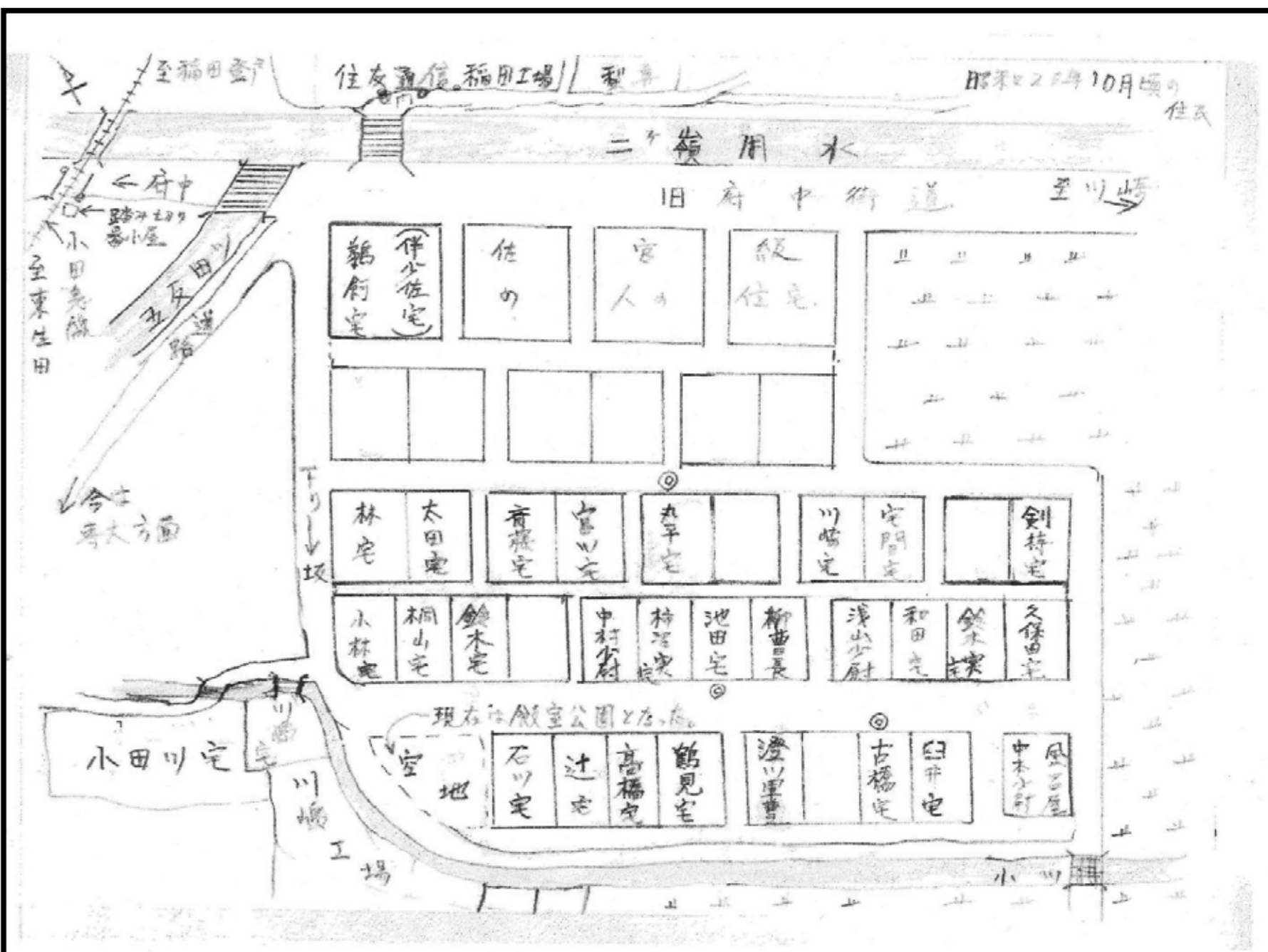
第三科関係者寮跡の旧土地台帳 輸送工作員寮があったと証言が残る場所の旧土地台帳。阪田誠盛が買収し、戦後は板垣清が管理していたことがわかる。※第三科関係者以外の個人名等は加工してあります。(横浜地方法務局麻生出張所蔵)

③元所員が居住した営団住宅跡

向ヶ丘遊園駅南口より徒歩数分のところに、登戸研究所員が住む営団住宅がありました。

ここには伴繁雄、久葉昇ら佐官級所員の戸建住宅4棟、尉官級所員の戸建住宅1棟、二世帯用長屋住宅8棟、軍曹・技手などが入る四世帯用長屋住宅5棟の他、41世帯が階級によって戸建住宅・長屋住宅に分かれて住んでいたことが、稲田郷土史会の調査で分かっています。

この一帯は、1943年12月に住宅営団によって買収され、登戸研究所員が住み始めました。第三科寮にも共通して言えることですが、1943年は登戸研究所の態勢が整い、組織が拡



1945(昭和20)年10月頃の営団住宅の様子 大野敏男氏がここに引っ越してきた頃の記憶を元にした図。 ※登戸研究所関係者以外の個人宅は加工してあります。(大野敏男氏作図, 森田忠正氏所蔵)

充していくタイミングです。また、風船爆弾の研究開発を命じられるのもこの頃です。

所員の多くは東京方面から通勤していましたが、研究が軌道に乗るにつれ、通勤にかかる時間が無くなってきたのでしょう。登戸研究所まで徒歩 20 分程度で通えるこの場所に居住し、研究に専念したことがうかがえます。また、戦況が悪化していく中、非常時に備えて登戸研究所近くに住んだということも考えられます。

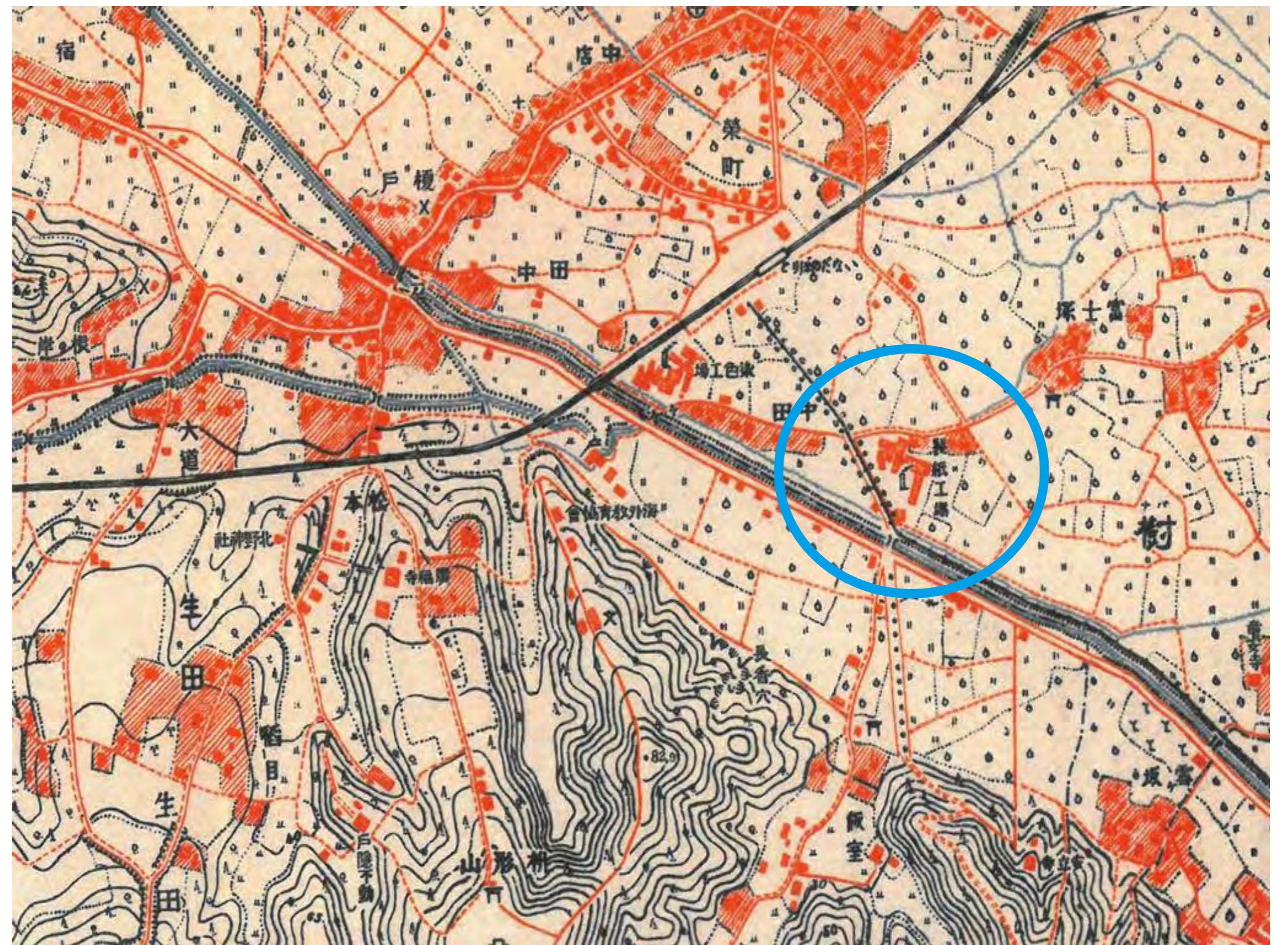


元所員が居住した営団住宅地の現在
左側、茶色のビルの場所が伴繁雄宅跡。
(2015 年資料館撮影)

④登戸研究所登戸分室跡

現・登戸～向ヶ丘遊園駅周辺は、かつては製紙業が盛んでした。そのうちのひとつ「玉川製紙」（現・ダイエー向ヶ丘店）は、1944（昭和 19）年に登戸研究所登戸分室に指定されます。主に資材置き場として使用され、登戸研究所から当番制で見張り要員が派遣されました。敗戦後は、偽札の製紙原料などが一時期保管され、第三科勤務者が見張りを行いました。

登戸研究所が引き上げた後、1947（昭和 22）年に山田紙業が分所跡に創業します。「特殊物件受払台帳」（下図参照、神奈川県立公文書館所蔵）によると、同年に山田紙業は登戸研究所の製紙関連物品の払い下げを受けていることが解ります。



登戸 旧 1 万地形図（1937 年測量，1940 年発行）より
○枠部が、玉川製紙などの製紙工場があった場所。（国土地理院所蔵）

製紙原料

木綿屑、古綿、^{みざらし}未晒パルプ、ボール紙、マニラロープ屑など

原料煮熟、調整用

苛性ソーダ、ソーダ灰、^{さらしこ}晒粉、消石灰、^{りゅうさんぼんど}硫酸礬土、^{みょうばん}明礬など

サイジング（インキの滲み防止）用

ニカワ、樹脂

その他

製紙用フェルト、機械油、石炭、鉄屑、戸棚、机など

山田紙業が払い下げを受けた主な物品

渉外事務局渉外課「昭和 27 年度 特殊物件受払台帳 川崎」より。（神奈川県立公文書館所蔵）

品名		数量	単位	納入先	納入年月日	備考
製紙用フェルト	2000	巻	4	山田紙業(株)	1952.10.15	亡失届出済
				道形軍機店		亡失届出済

「昭和 27 年度 特殊物件受払台帳 川崎」

渉外事務局渉外課 1952 年作成。「製紙用フェルト」が払い下げられたことがわかる。（山口醇氏撮影，神奈川県立公文書館所蔵）

また、山田紙業は偽造法幣の切れ端の払い下げを受けたとの証言も残っています。戦後、紙の需要が高まり、再生紙製造は製紙業界で重要な位置を占めます。しかし原料が足りず、粗悪紙が多く流通していました。このような中、山田紙業は良質な紙質の偽札を原料にすることで、再生紙の質を上げたといえます。その後同社は旧日本円札の払い下げを受け、これを再生紙原料として使用しました。

⑤小田急線～南武線引き込み線跡

現在の三菱東京UFJ銀行登戸支店の辺りから南武線宿河原駅方面に向かって、小田急線と南武線を結ぶ引き込み線が延びていました。この引き込み線は砂利運搬を目的とし、1936（昭和11）年に両社の相互乗り入れが始まりました。戦後、車両が足りない時は、この引き込み線を利用して両社間で車両の貸し借りも行われたようです。

1936年というと、登戸実験場が開設される前年に当たります。それでは、この引き込み線と登戸研究所は何か関連があるのでしょうか。

登戸研究所の製造品（偽札など）はトラックで登戸駅前の運送会社に運び、南武線に乗せたため、この引き込み線を利用することはなかったようです。当時の道路事情を考えると、東生田駅に行くより、直接登戸駅まで行った方が便利だったのでしょうか。しかし、東生田駅周辺を整備し、小田急線から引き込み線経由で登戸研究所の製造品を南武線に乗せる計画もあったという証言が残ります。



(上) 登戸 旧1万地形図

(1937年測量, 1940年発行)

(下) 1947年米軍撮影航空写真

赤枠部が小田急線と南武線を繋ぐ引き込み線。また、南武線宿河原駅付近から、多摩川の砂利を運搬するための砂利線があったことも確認できる(青枠部)。

(いずれも国土地理院所蔵)

(2) 登戸研究所周辺の整備

登戸研究所が開設されたことに伴い、田畑・山林しかなかった周辺が整備されます。まず研究所周囲の買収が1938（昭和13）年に行われ、(A)部の道が整備されました（下図参照）。次に、東生田駅方面の道が整備されます。1941（昭和16）年には研究所から津久井道に通ずる道は整備されておらず、東生田駅に行くには足元が悪い林を抜けなければなりませんでした。そのため、1943（昭和18）年に踏切北側を買収して道を整備し、東生田駅からも通勤できるようにしました。また、前節に挙げた、東生田駅から登戸研究所の製造品を運搬する計画に伴うものなのか、同駅前や線路周辺は1944（昭和19）年5月に、東急電鉄（1942年に小田急は東急に吸収合併される）によって買収が進められます。



東生田駅 津久井道 踏切 小田急線



（上：1941年陸軍撮影，下：1947年米軍撮影，いずれも国土地理院所蔵）

区画番号	面積	所有者	用途	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

区画番号	面積	所有者	用途	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

「土地台帳」より
 （左）現・明大正門から浄水場
 道りへ抜けるあたりを陸軍省が
 買収している。（右）現・生田
 ハイツ，生田8-2-3周辺を陸軍
 省が買収している。（横浜地方
 法務局麻生出張所所蔵）

区画番号	面積	所有者	用途	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

「土地台帳」より
 現・小田急OX北側を東急電
 鉄が買収している。（横浜地
 方法務局麻生出張所所蔵）